

研究の棗

日本古建築研究の棗 (第三十四回)

天 沼 俊 一

第三十四 窓 (中の下)

江戸時代の續き

第三〇五圖は山城宇治の興聖寺廻廊の連続花頭窓である。而も上のところは柱の側面へさし込んであり、普通の謂はゆる花頭型をしてゐない。この様なのは新しいものに相當に見出されるが、古いところにはない。

之の廻廊等は、ごちらかといふと間に合はせものゝ如くで、威嚴等は餘りないが、花頭應用の一例とすることはできる。中央の出入口に吊込んだ

棧唐戸は、上が楣になつてゐるのが物足りぬ。こは一層の事他と同じ様にした方が好結果を齎したであらう。併しながら、ごの様にしたところでのまゝでは、薄つべらだといふ感はとり去ることができぬ。

第三〇六圖は長野市善光寺如來に奉仕する別當職なる大勸進の扉と門番所とである。扉のは前圖と同じく連続花頭であるが、これは横に長くて背が低いから、櫛型窓の連続の様に見える。門番所の左の方の切妻になつて突き出てゐる部分のは拙

い形だが上が少し込み入つてゐる。この形は前號にだした第二九四圖及び本號第三一一圖の如きもので、これ等の仲間に入れても差支のないものである。

第三〇七圖は日光東照宮裏、瀧尾神社へ行く道にある地藏堂ので、建物は柱も壁も貫も全部朱漆塗、窓は框も格子も黒漆塗である。前二圖と同じ考へで、たゞ全體が窓になつてゐぬ丈けの差である。なせなら彼等に於いては別に後ろに戸をたてる必要がないから、柱間一ぱいの孔をあけることができたが、これはさうはいかない。之の場合には兩方へ引あける戸がたてゝある。さうして普通有觸れた形では面白くないでも思つたものか、上の花形のところ丈けを引伸ばして兩側の柱までつけ、途中の茨のところから左右の框をたてゝある——勿論この様な意匠は敢てこれのみではなく、他にいくらかも實例はあるが——故にこの場合、花

頭窓として實用になつてゐる部分丈けを考へてみると、茨は中央に上向きに一つある丈けで、最も簡單なる形といはねばならぬ。

第三〇八圖は大原の往生極樂院、といふより三千院といつた方が一般に知れ渡つてゐる名であるが、その寺務所の玄關西脇の花頭窓である。繪に描いた富士山の様な形をしてゐるのを「富士花頭」といつてゐるが、これはまん中のところがいやに平たくて、到底富士山の様な形ではないから、さういふ名は當らない。然らば何と呼べばいゝのか私は知らない。富士花頭にしても餘りいゝ形とは思へぬ。とにかくこの様に原意を失つた形は用ひぬ方がよささうである。

第三〇九圖は京都西本願寺五柳の間の大花頭である。これは同寺黒書院裏手に當る建物で、其うちの一室の名稱であるが、通例拜觀者はこゝ迄見られぬことになつてゐるから、一般にこの窓は知

れ渡つてはゐない。これは第二九一圖なる同寺飛雲閣の窓を少しまづくしたやうなものである。

之れをもう少し手をぬいたのが第三一〇圖で、同寺境内のすつと奥の西北隅に近い、大谷尊由師邸なる百華莊と稱する建物に用ひてあるものである。前圖の上の方の出た茨と下の方の引込んだ茨とを取り除き、僅か兩方押しちぢめるとこの形ができ上る。

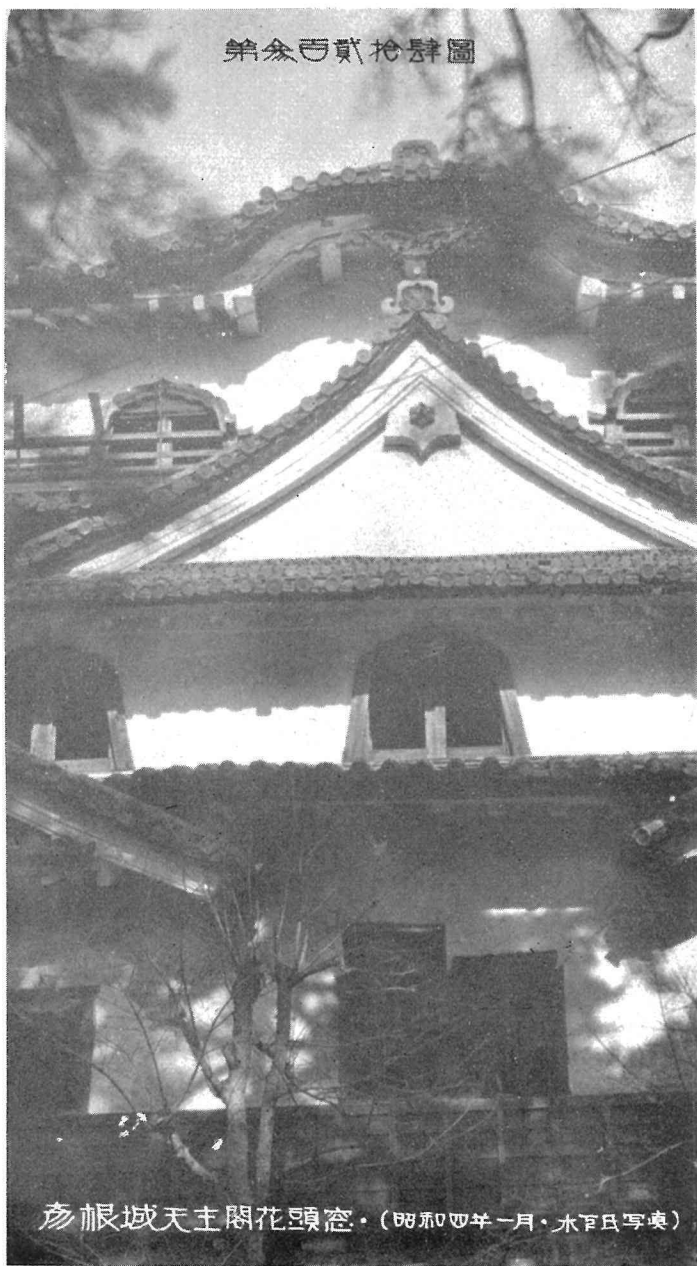
第三〇九・第三一〇圖等に示した形が何故に觀者に満足を與へぬかと同時に、第二九一圖はなぜこれ等程に變でないか、といふことを考へてみると、飛雲閣の大花頭でも決して申分のない程度といふ形でないのはいふ迄もないことであるが、ここに圖示した二つになると、何れも兩肩が下がつてしまつたから、全體として締りがなくなつてきたのである。併しまだ第三〇九圖の方がいゝ。第三一〇圖に於いては、兩方のでたところがいやに

膨れてゐる上に、下のところの曲線の形が如何にも工合がよくないから、これ等が恰好の不満足を來す主な原因であらうと思はれる。

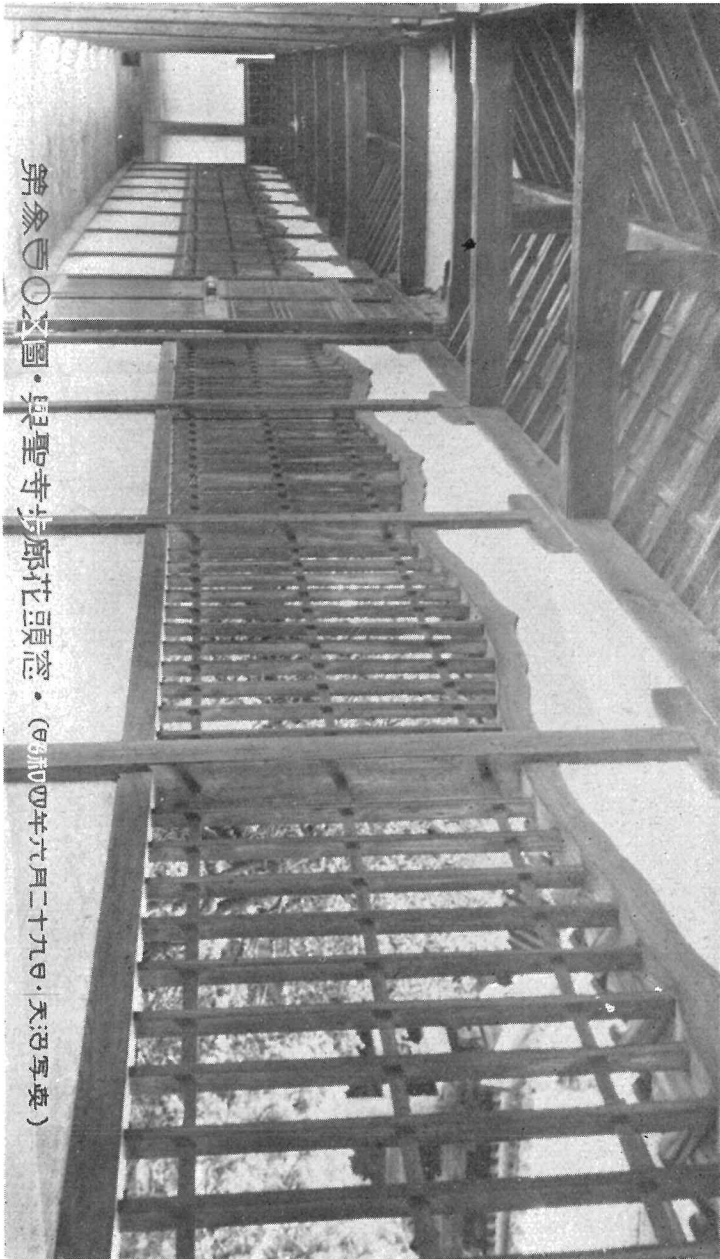
第三一〇圖は紀伊の道成寺庫裏書院窓である。

上の欄間には松皮菱を入れ、下の花頭の上の輪廓は三千院のと殆んど同じであるが、應用の場所と窓の廣さとにより、これ丈け異なつた感を與へるのである。これがもう少し略され、茨もなく反り方も上の方へ丈けになつたもの、即ち先づ缺圓拱(Segmental Arch)といつたやうな形がある。これは前號に圖示した桂離宮上段の間の窓の上の方を、一連續曲線にしたやうなもので、地方色か何か知らぬが、伊豫——とは限らぬかも知れぬが——地方で多くみるところ、一例を挙げると温泉郡和氣村太山寺庫裏書院窓がさうなつてゐる。極く新しいところでは道後湯の町の宿屋の座敷等に用ひてある。これ等は花頭窓を最も簡易化したもの

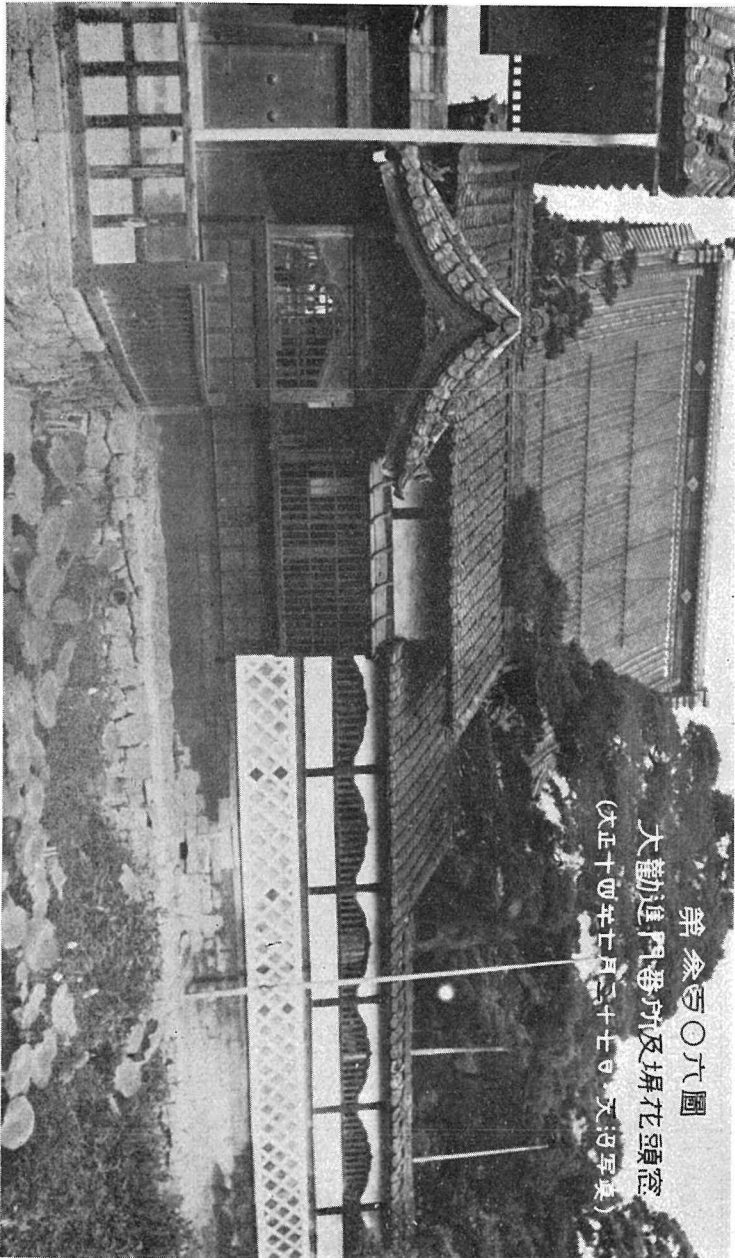
圖肆百參第



窓頭花閣天主城根彦・(昭和四年一月・木下氏写真)



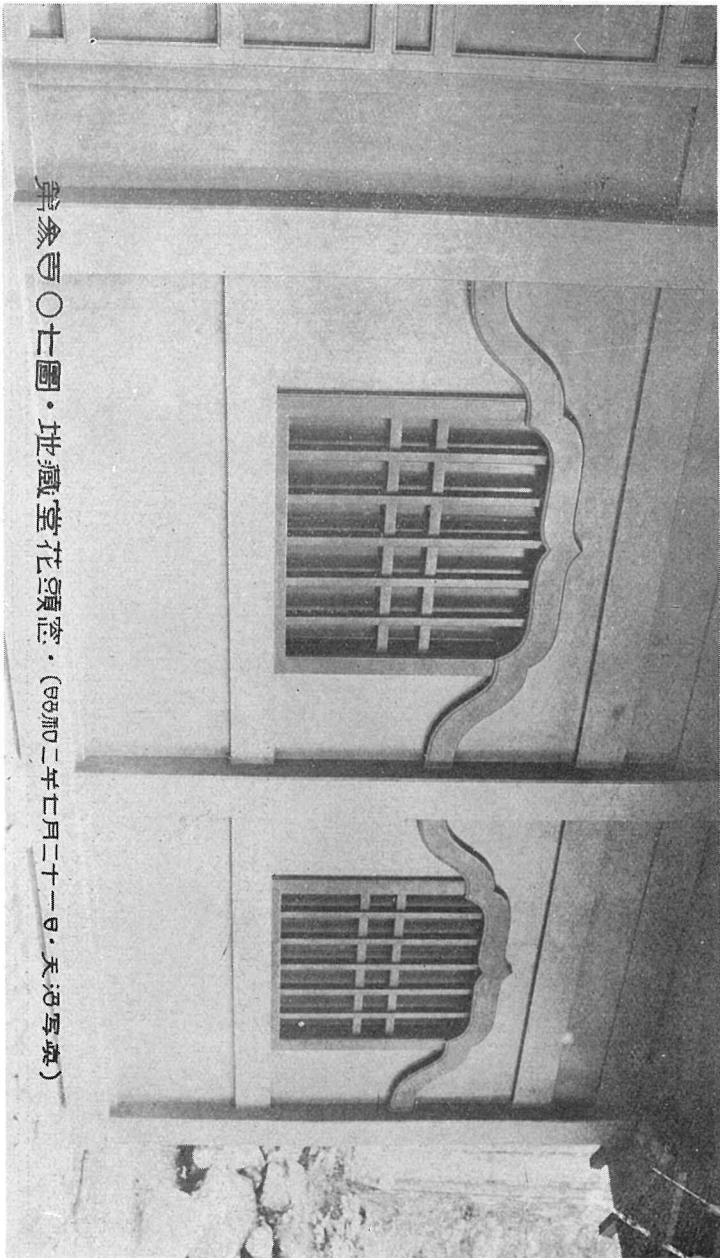
第參〇〇圖・興聖寺坊廊花頭窓・(明治四十四年六月二十九日・天沼写真)



榮 參 〇 九 圖

大勸進門番所花頭窓

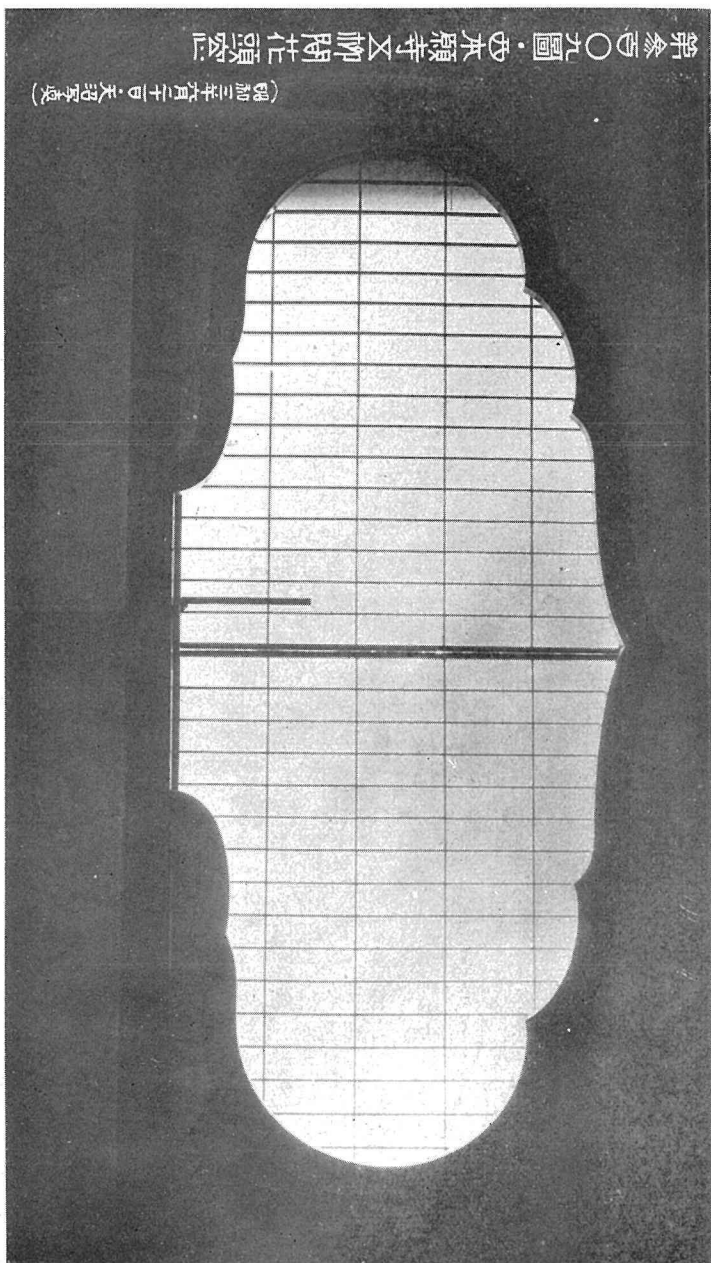
(大正十四年七月二十七日 天沼厚典)



第參百〇七圖・地藏堂花窓窓・(昭和二年七月二十一日・天沼写真)

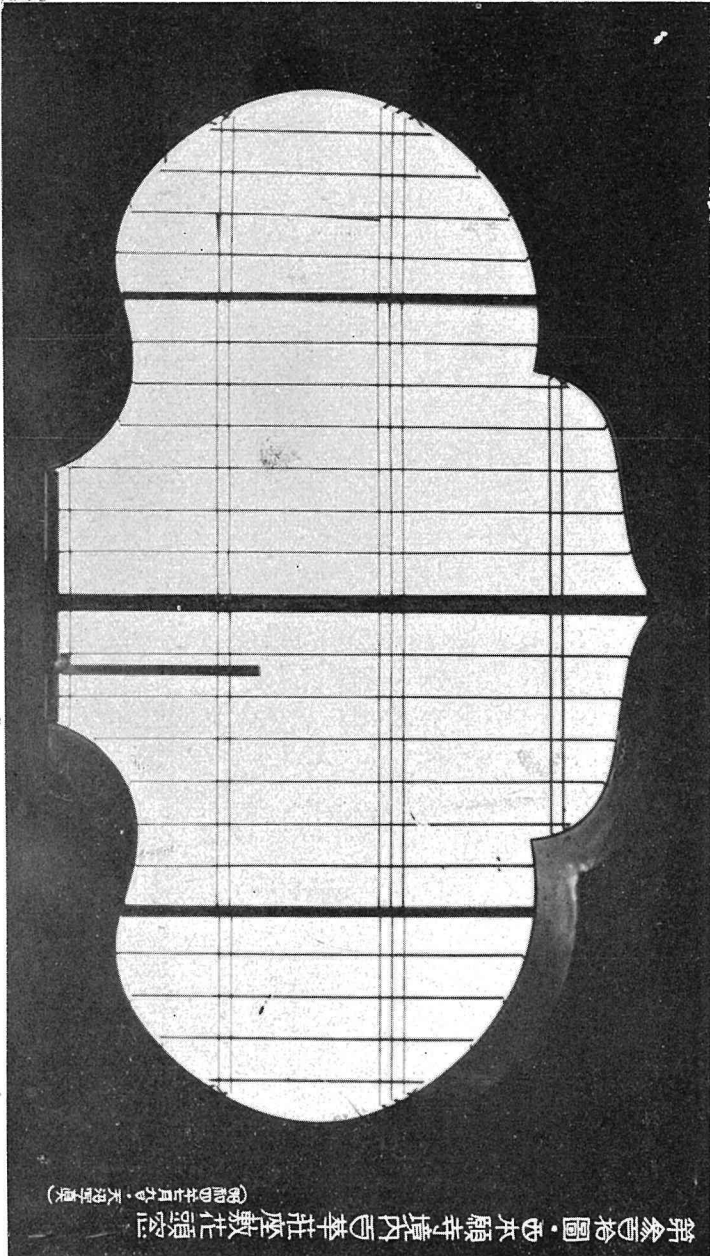


第參百〇八圖・往生師樂院寺務打込障子窓(大正十四年三月十五号・天沼字庫)

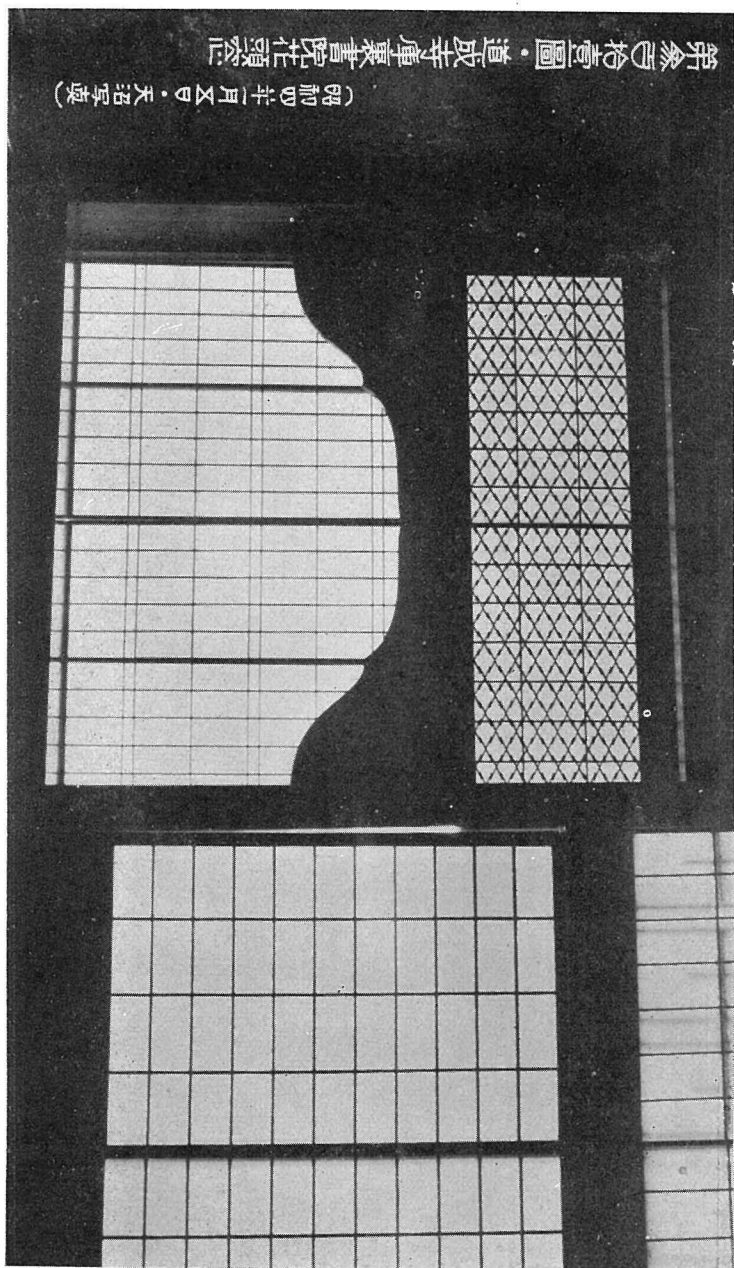


築參号〇九圖・中央懸寺又柳井頭公記

(昭和三年七月十日、天沼草堂)



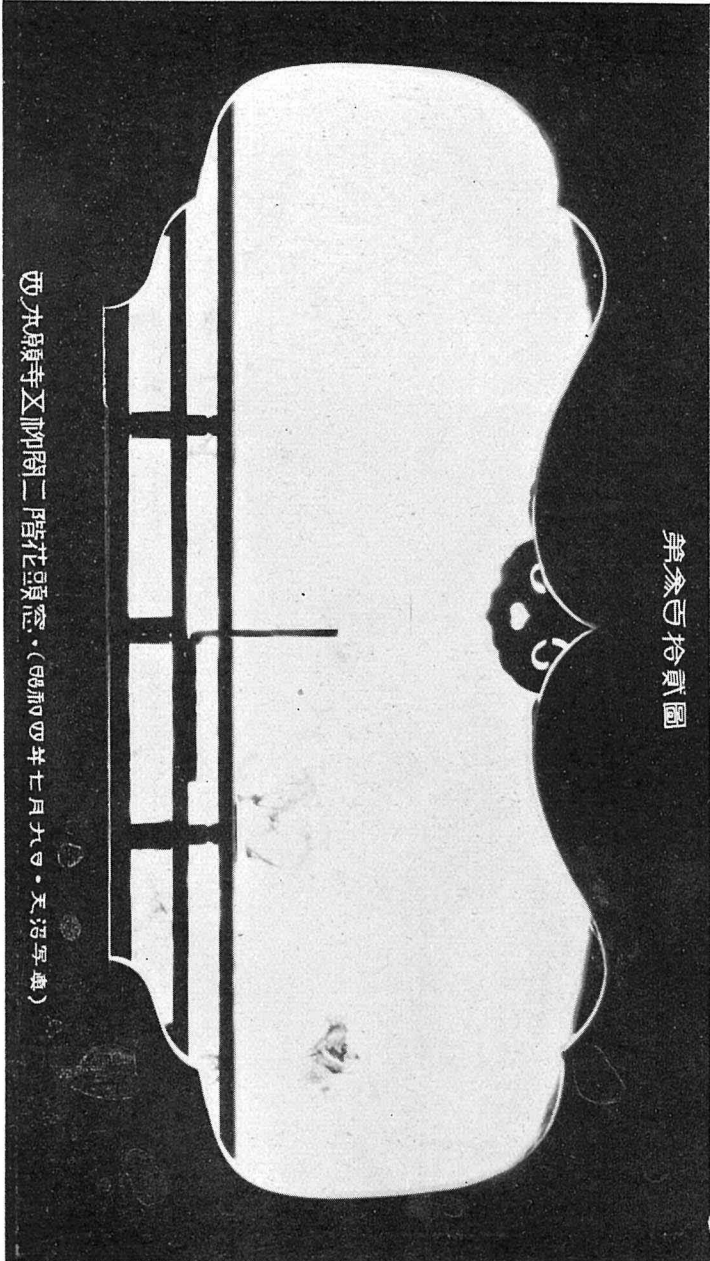
第叁拾圖・西本願寺境内白峯社座敷柱障子
(京都府立白峯寺・天沼對照)



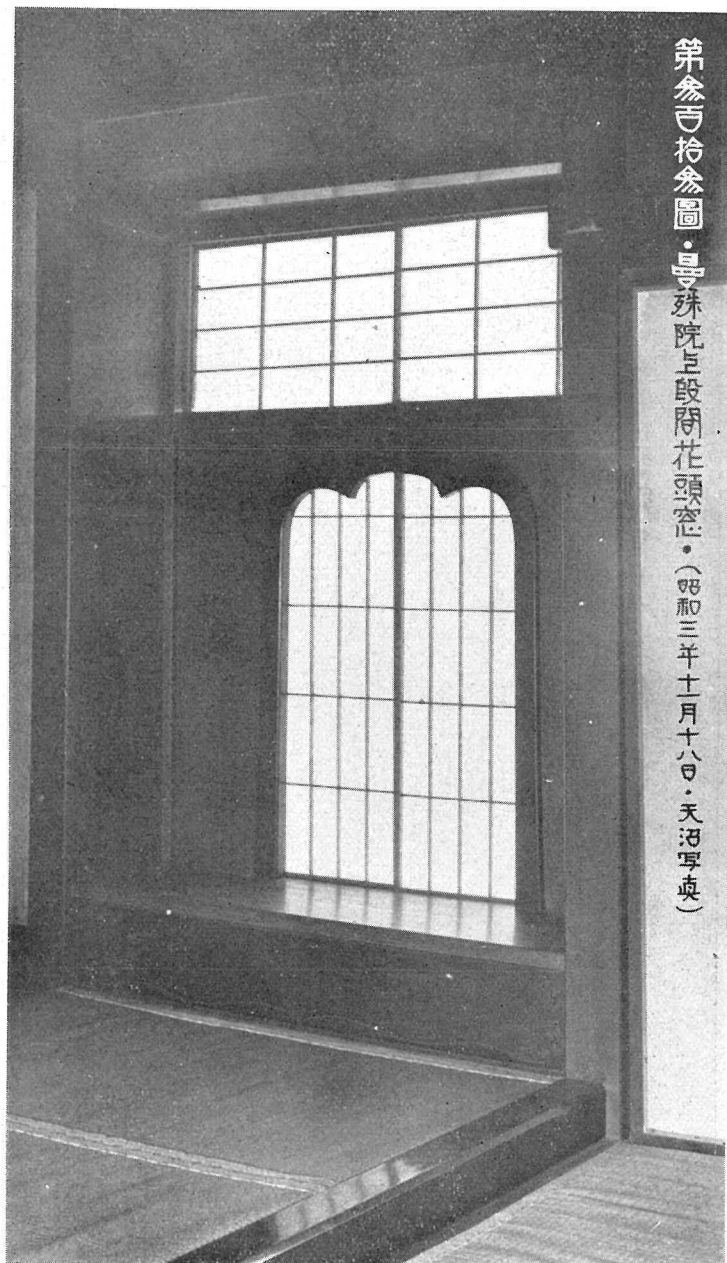
筑參(四)松亭圖・道成寺庫裏書院柱頭窓

(昭和四十二年五月五日・天沼宮殿)

第參百拾頁圖



西本願寺区柳閣二階花豆窓。(昭和四年七月九日・天沼写眞)

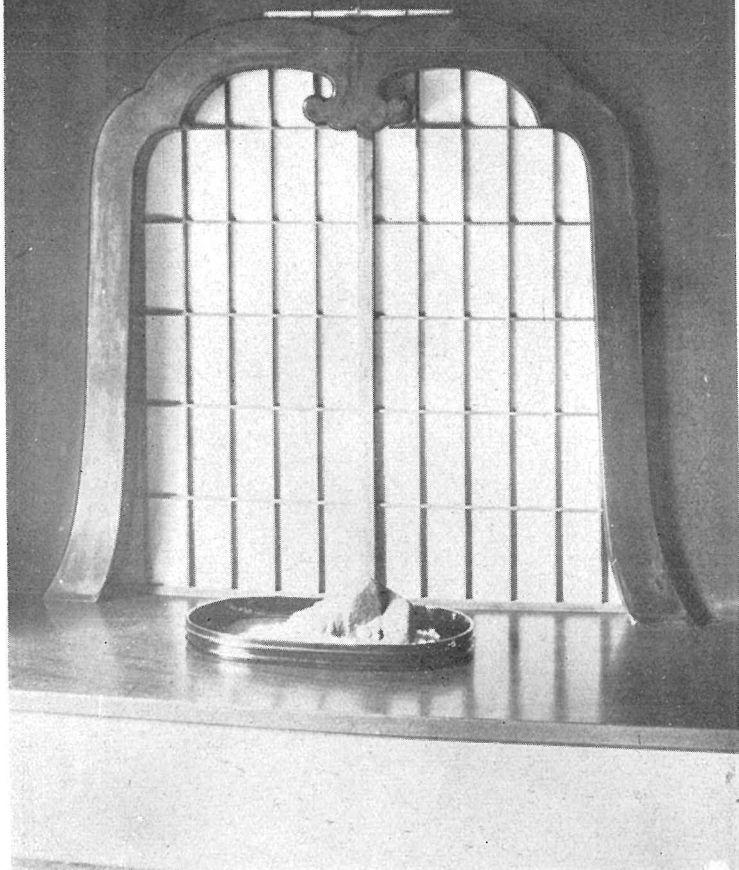


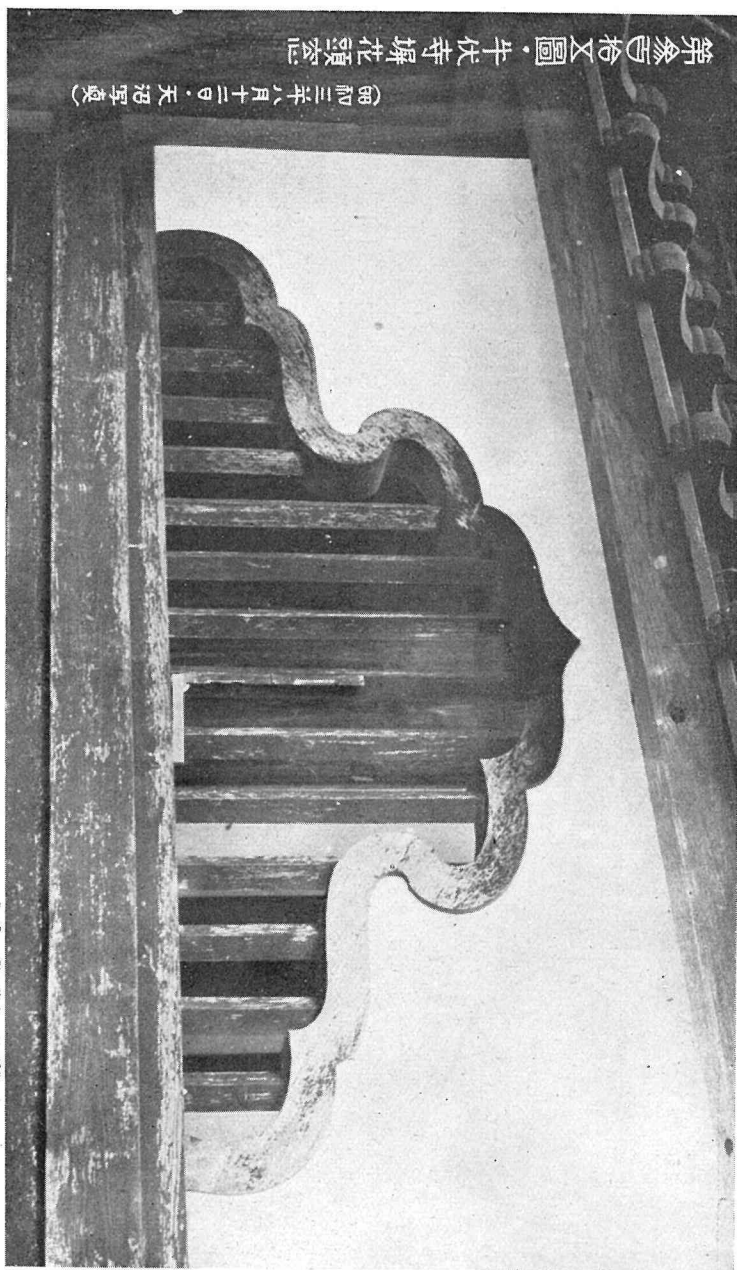
第參百拾參圖・曼殊院上殿間花頭窓・(昭和三年十月十八日・天沼写真)

第四拾百參第

花頭窓床庵荻孤・(上に平たくあるは曲尺の約一尺)

(昭和四年十二月十五日・天沼写映)





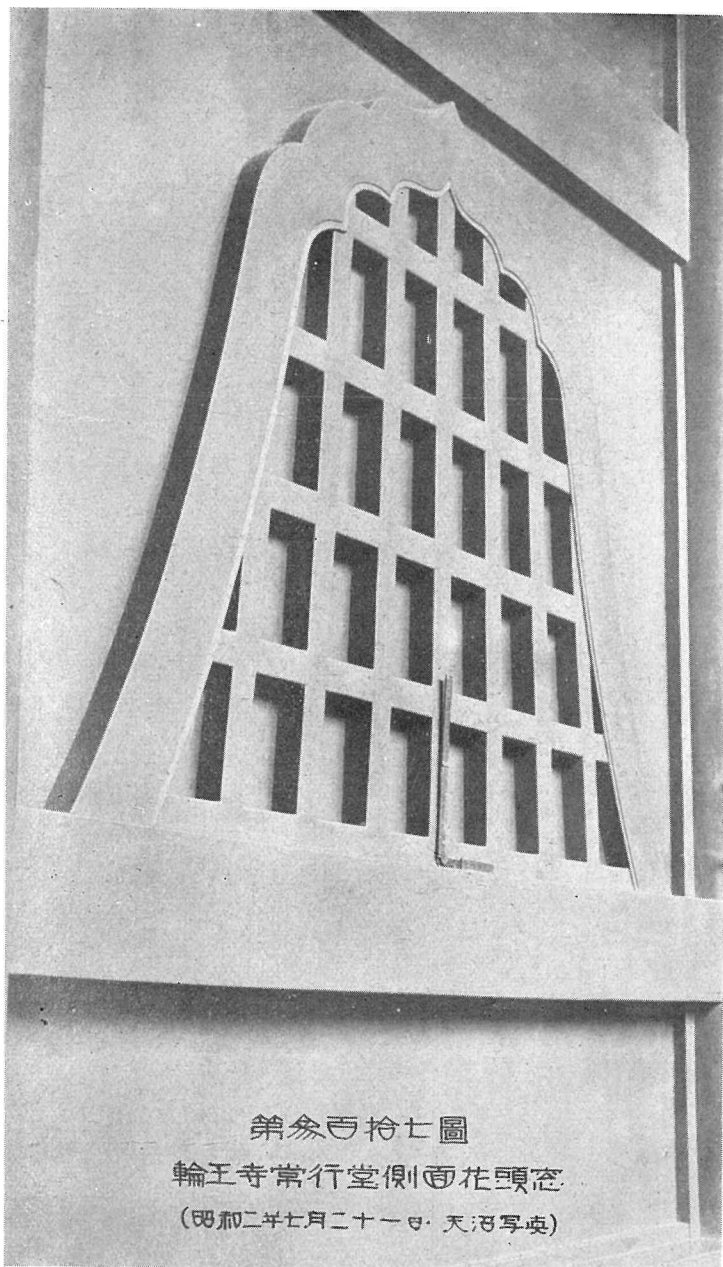
築參の槍又圖・牛伏寺堀花頭窓

(昭和三年八月十二日・天沼写真)

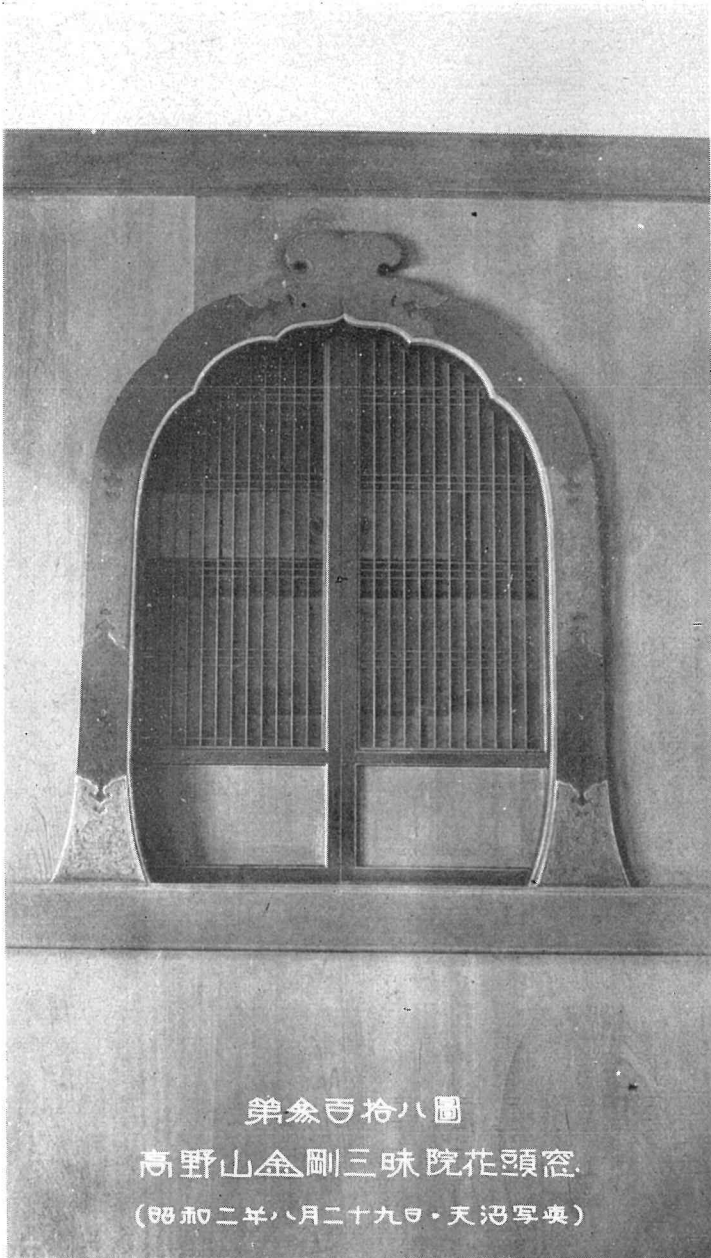
第參四十六圖・榮福寺大雄殿上層側面盲花頭窓



(昭和二年二月三十一日・天沼厚典)



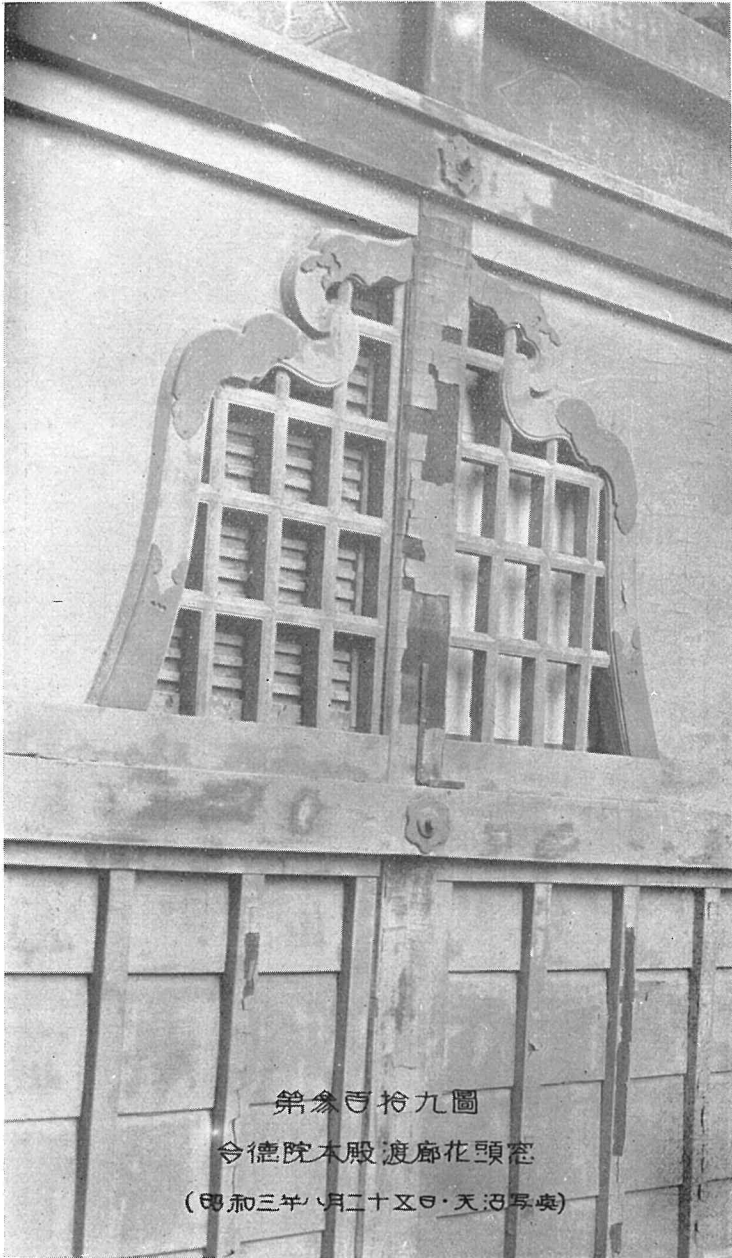
第參百拾七圖
輪王寺常行堂側面花頭窓
(昭和二年七月二十一日・天沼写真)



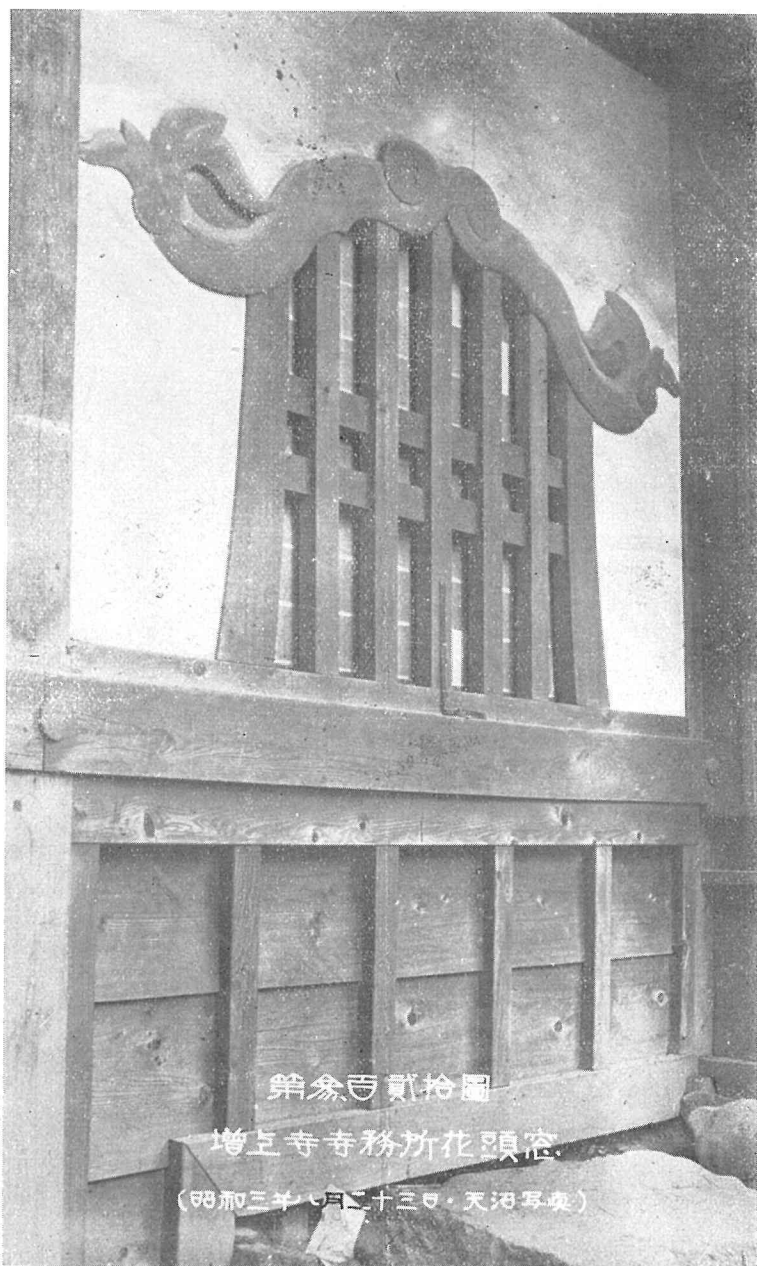
第八百參號圖

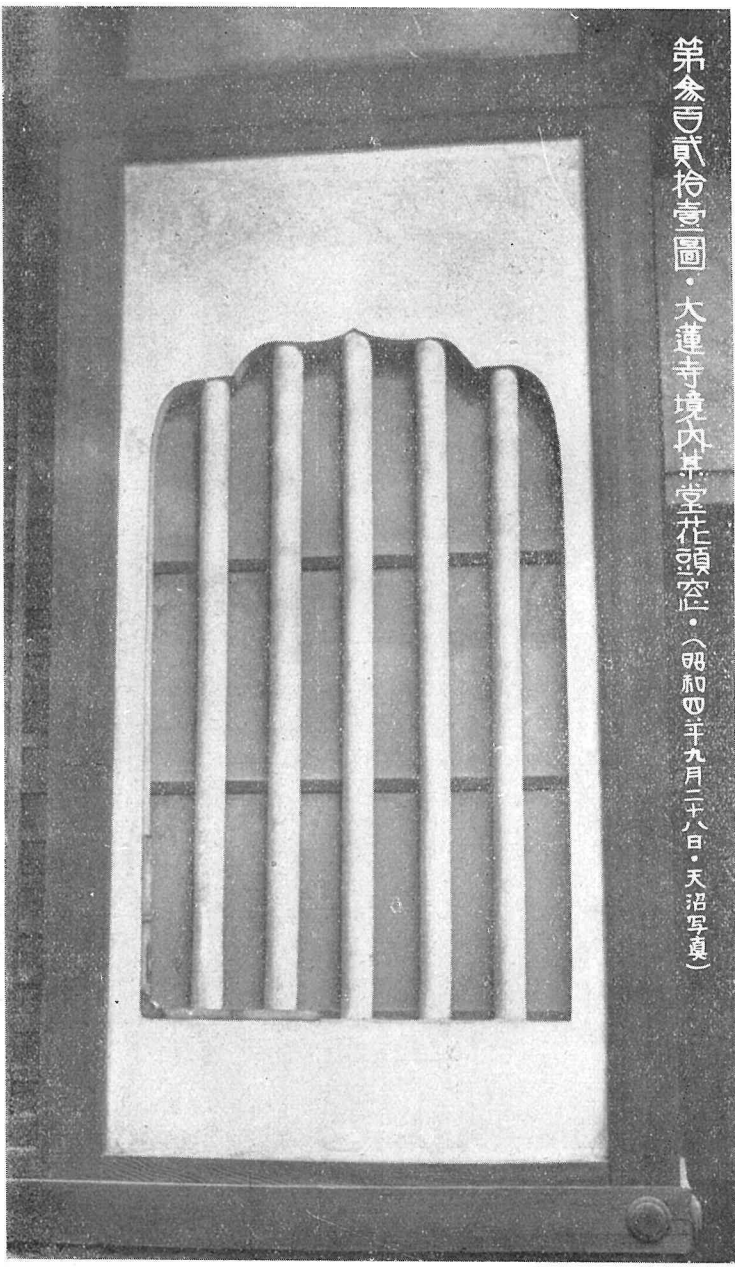
高野山金剛三昧院花頭窓

(昭和二年八月二十九日・天沼写真)

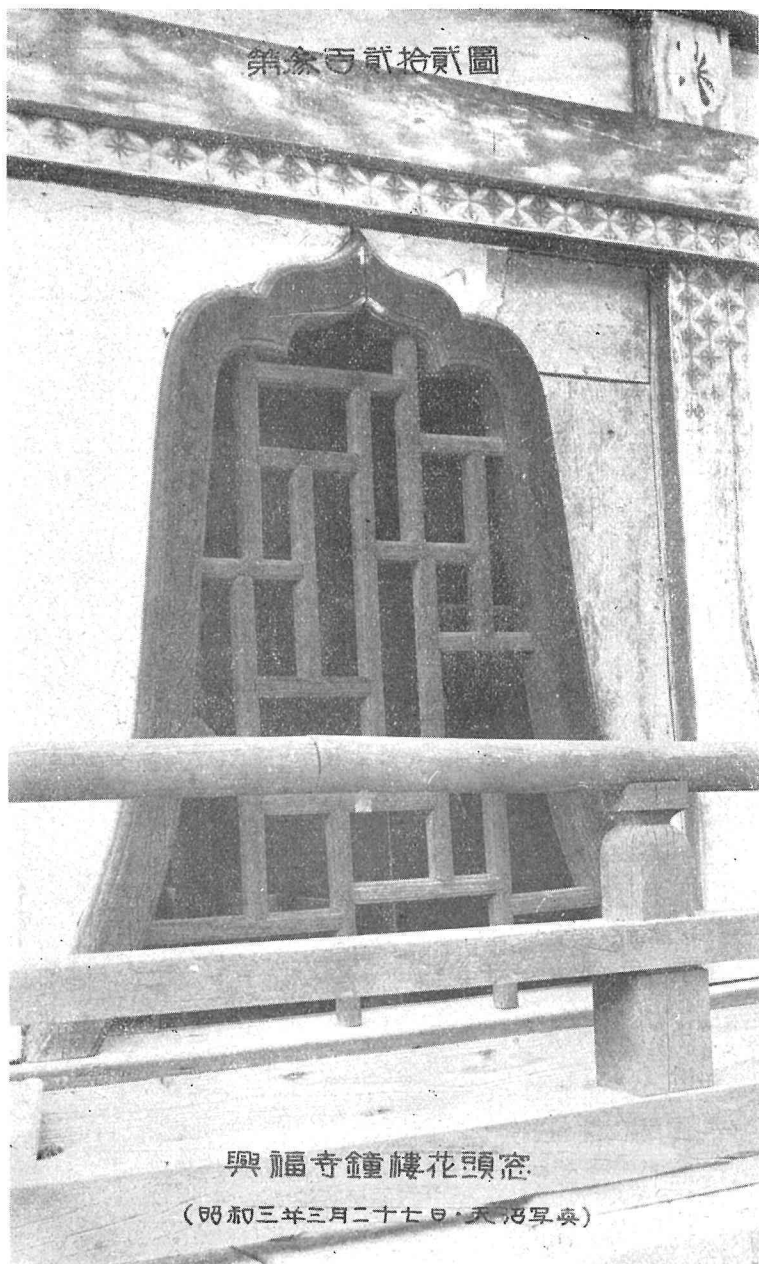


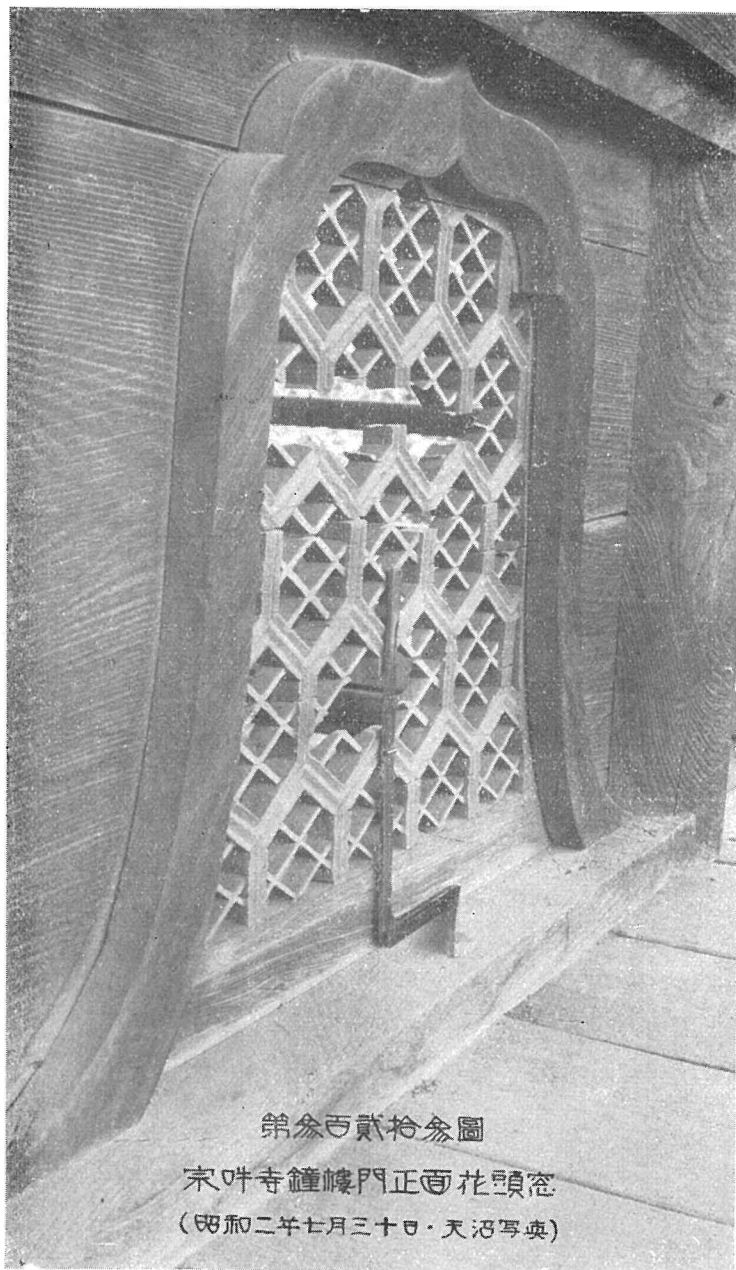
第參百拾九圖
令德院本殿渡廊花頭窓
(昭和三年八月二十五日・天沼写真)





第參百貳拾壹圖・大蓮寺境内某堂花頭窓・(昭和四年九月二十八日・天沼写真)





第參百貳拾參圖

末叶寺鐘樓門正面花頭窓

(昭和二年七月三十日・天沼写真)

とみた方が、楕形窓の應用と考へるよりよささうに思はれる。

第三一二圖は、また元へ戻つて西本願寺五柳間の二階の北に向つた花頭窓である。四疊半位の小さい間が北の方にでてゐて、そこにこの大花頭があり、其上に唐破風がかゝつてゐる。下からでは霽影があつてどうしても撮れないから、止むを得ず二階へ上つて障子をはづして内から寫したのである。

曲線を如何に取扱へば始末がいゝか、どうすれば縮りがあるか、どういふ注意が缺けると反對に思はしくない形ができ上るか、といふ様なことを少しも考慮せずに、たゞ漫然と獨想的のものを作りださう(?)とすると、結果は多くの場合この如き氣の毒な形になり勝である。

之れも亦第二九一圖と曲線の形も茨の數も、乃至全體が横に平たいところも同じであるのに、か

うなつて了つたのは、全く其性質即ち曲線の取扱方に原因したので、まことに惜しいことゝ言はねばならぬ。

第三一三圖は甚ださつぱりしたもの。曼珠院の座敷の上段の間の書院窓で、上の欄間と共に私には大分氣に入つたのである。恰も桂離宮上段間の如く、あれをずつと單純化したので、あの様に上段丈け天井を低くし、床も丁度框のせい丈け上げである。簡單もこれ位までいくと、上段の間だからといつてさう肩もこらず、洵に心持のいゝ作り方である。

第三一四圖は大徳寺塔頭孤蓬庵ので、この様な形——前號第三〇四圖の如きも——のを「蕨花頭」と呼ぶのである。この窓の外は室になつてゐるから、採光よりは寧ろ裝飾のための窓である。仲仙寺のと殆んど同じであるが、恰好はこの方がいくらか上である。あつてもなくても大して影響のな

いどころへ、主に飾りとして用ひた一例となすに足りる。上に平たくおいた白色の尺度は、英國製一呎である。いくらも違はぬから、この場合約一尺と見て差支ないのである。だから圖版には曲尺の約一尺と書いておいたのである。

第三一五圖は牛伏寺(Gonzenji)とよむ、誤植に非ず。「牛玉」とかいつてGotoと發音すると同じである。庫裏の脇の塀についてゐるものである。

牛伏寺は長野縣松本市を距る約三里、東筑摩郡片丘村の山腹にあるが、乗物の利用できぬ所が一里餘あるから、行くなら其覺悟をせねばならぬ、併しながらゆきついてみると、立派な彫刻が澤山にあるから、努力は決して空しくなく満足せぬものはないからうが、建築物の方は何れも香ばしくないものばかりである。この窓にしても、前號に掲げた日光陽明門・東照宮石之間・本地堂等の夫れを簡單にし、上の方に近く水平に切斷するとこれに似た

ものになる。一見大に變つた形の様に見えても、さうでないことは直に氣がつくであらう。この形は併しながら全體がブク〜と膨れ、まるで締りのないとろけた様である。

第三一六圖は長崎崇福寺大雄殿ので、これまで何度も引合にだしたから、窓は初めてだが寺の名は馴染な筈である。之の建物は外からみると二重の佛殿であるが、内部は一重であるから、この様な所へ窓をつけないでも採光は充分であるし、また明層の必要も全く認めぬのである。けれども外側が何もなしでは淋しいから、裝飾としてこの盲窓をつけたのであらう。

屋根の上迄登つて近づいてよく調べたのではなく、下から見ておいたのであるし、夕刻日が可なり低くなつて、この窓の所へ夕日が一ぱいに當る様になつてからとつた寫眞である。實物をみたくもさう思つたが、これでみても引戸を兩方から

しめた様に見せかけてある。其戸は花狭間を入れたので、珍らしいおもしろい透彫である。

大雄殿と向ひ合せに護法堂といふのが建つてゐる。この正面の花頭窓に吊り込んである兩開の花狭間戸は、既に第十二卷第三號(第一六)に掲げておいたが、之れを閉ぢたときに花頭窓の輪廓内に其扉の一部分が見えるところは、丁度この寫眞のその様の様である。してみるとこれは、向ひ同志であるから、あれと調和をとるため、この様に意匠をしたのかも知れない。

栃木縣日光町、輪王寺所屬の常行堂(大猷院廟入 口前に在り)

には花頭窓がいくつもつけてある。堂は柱も壁も朱漆塗、窓と棧唐戸とは黒漆塗になつてゐる。正面の方のは窓としては左程役にたゝぬが、ともかく格子の間から光線が入る様になつてゐる——この意味は戸口から、充分採光ができてゐるから、窓は大して必要でない、寧ろ裝飾窓として正面を

賑はしてゐる、といふ方がいゝ——から、存在の意義はあるといへる。然るに

第三一七圖は形こそ同じであるが其側面についてゐる盲窓が全くの飾り窓、これこそ全部壁であつて差支がないのみならず、寧ろ壁であるべきのに、さうしないで頗る入念のがつけてある。珍らしいのは格子の縦子が普通垂直であるべきに、この場合は上で狭く下で廣くなつてゐることであつて、うづかりしてゐると氣がつかぬかも知れぬがこの様な例はさう澤山はないやうである。

第三一八圖は高野山金剛三昧院ので、氣の毒ながら形が思はしくない。輪廓を内外共同様に外へ反らせたならばいく分よかつたらうに、内側を内へ反らしたため、下の方は撥形となり、座りはよくなつたかも知れぬが、上の方も力が少しも入つてゐぬから、まるで江戸時代の吊鐘や半鐘をみるやうに、不愉快な格好が眼の前に浮び上つてくるの

だから、どうも心持がよくない。さうして一ぱいに文様を彫刻した金銅飾金具等を打ち、其後ろにたてゝある兩引の障子は、緑色の目の荒い何でも紗(?)の様なきれをはつてあるから、内がすけて棚等も見え、大變に美しいがどうも感心ができかねる。大徳寺孤蓬庵のやうなのを蕨花頭といふことは既に述べたが、これは其蕨のうづ巻が上へで丁つたのだから、これでもやはり蕨花頭といふのか、或は他に何とかいふ名があるのか、私はよく知らない。一層の事新しく「吊鐘窓」といふ名にでもしたらよささうである。

第三一九圖は東京芝公園内、徳川二代廟の本殿から御供所への渡廊ので、角柱を挟んで左右半分づゝ、つまり兩方で一つの完全な形になる様にしてある。かうなると、これも亦元の意味が全く失はれてしまつたので、たゞこの様な形——日光廟の各建物に於ける夫れと殆んど同じなのは蓋し當

然であらうが——の窓を、まん中から縦に二つに割つてついたのであらう。花頭窓なるものが、元來多葉拱で、而も石の多葉拱であつたらう、といふことに考へつけば、これはこの種の窓として無意味なものであることが判るであらう。

此の窓の格子に一つづつ鎬がつけてあるのは、たゞかうしてみた迄の事と解しておけばいいであらう。元はどうであらうと、思ひ切つてか、或は多分何も知らずに、丁度適當(?)なところに柱があつたから夫れを挟む様にして、ま二つに割つたところは洵に勇敢な處置で、臆病なものにはやりかねる。この點に於いて獨創的の意匠が大に働いてゐるといへるのである。

少しく紛ひものゝ氣味はあるが、實物をみやうと思ふなら、私は京都市に於いて一つ實例を擧げ得る。極めて便利なところ、四條寺町新京極で電車を下りて南へ曲り、二三軒か四五軒行くと左側

の、家政女學校のある大雲院本堂の側面をみると
よろしい。ものはすつと簡單であり、且つ兩肩は
まるい丈で花頭型にはなつてゐないがやり方は
同じである。もつとあるかも知れぬが、これ以上
今のところは知らない。

第三二〇圖は東京芝増上寺寺務所窓の一で、花
頭の變形して若葉になつたものであり、變つては
ゐるが更に感心のできぬもの。これでは到底上の
重荷を支へるごころの騒ぎでなく、一たまりもな
くつぶれて了ふこと確かである。一見して極く新
しいものたる事が判るであらう。こんなのも珍ら
しい方で、恐らくこれ以外にあるまい。拙い方の
例に最も適當なものである。

第三二一圖は、大阪市天王寺區下寺町一丁目、
大蓮寺境内庫裏脇の名を忘れたが小さい堂ので、
どう／＼終にこの様なものができたといふ例にだ
したのである。全然輪廓なく、たゞ壁に花頭型の

孔をあけ、全部壁と同じく漆喰を塗り、縦に五本
圓形の漆喰塗の棒を格子の如くたてたのである。
おもしろくもおかしくもない點は天下一品といへ
るであらう。

第三二二圖は、長崎市興福寺鐘樓のもの、其恰
好の良否は第二とし、狹飾として巾崩の組子を入
れたごころを感心したのである。而も其組方は、
一定の規則に従つた如くで實はさうでもなく、自
由なやり方をしてゐる。この興福寺は支那から大
工がきて、本堂をたてたのださうであるから、或
はその折にでもこの組子を造つていつたのかも知
れない。既に半扉の例のごころに圖示したやうの
だ(第十二卷
第四號)、一定の法則に従つて居り、而も澤
山にあるからさう珍らしくはないが、これは中々
おもしろいやり方である。これでもう少し輪廓に
注意したら、非常ないいものになるであらう。

第三二三圖は長野縣上田市にある宗畔寺(のり)

(三) 鐘樓門のである。勿論新しいから形はよくないが、花頭型の中に龜甲型が入り、更に龜甲型の中に斜に井桁が入れてあるから、珍らしいものといへる。これで上方の途中に茨がなくて、四心拱(4-centered arch)の様な輪廓をもち、龜甲型がもう少し小さくでもあらうものなら、それこそ印度サラセン建築の窓又は障屏の白大理石透彫の格子あたりと、どれだけの差があるかと言ひ度い位のものである。

併しながらこれは總てが拙い上に、彼は石で精巧、これは木で粗末、到底角力にはならないが、人の考へといふものは、大概似たりよつたりであるといふ證となると同時に、變つて例としてみるこゝろができるであらう。

確か日光大猷院廟内の夜叉門の下層、頭貫と飛貫との間がすいてゐて、そこに龜甲型の狭間飾が入れてあつたと記憶してゐる。だから空間に龜甲

型は江戸時代に入つてから用ひた例はある——工藝品や模様等には随分古くからあるから問題ではない、こゝでは建築の空間に狭間飾として用ひた例を考へてゐるのである——が、この窓のはこれ等によつたと考へられない、あの門を建てた田舎の大工が、一廉考へたつもりか何かで、やつてみたのであらう。サラセンとの暗合が少しばかりおもしろいのである。

以上で江戸時代の實例を終る。要するに

當代に於いては益々種類が多くなり、従て形も變つたのができだし、よくいへば從來の型を破つたものができし、よくいへば從來の型を破つたもの、悪くいへば元來の意味が忘れられてしまつたもの(日光東照宮陽明門、東京芝罘德院廟本殿渡廊)、不用の所へ單に裝飾の目的を以てつけた斗りでなく、連子の内へ圓紋を入れたり(東京芝罘德院廟入口四脚門)、上の部分を若葉にしたり(東京芝罘上寺庫裏)いろ／＼した。また

狭間飾が發達し、**卍崩**（長崎市興福寺鐘樓）・**龜甲模様**（上田市宗門寺鐘樓）等もできたしたりした。また住宅への應用

も多くなつてきて、座敷等へは横に平たい形のを

用ひ（西本願寺五柳間及階）、又は前代の續きとし

て書院（曼珠院上段間）・**床脇**（實例）等に用ひられた。

これ等のうちには至極便化し簡易化し、茨を全

廢して下に反らせ缺圓拱の如くにしたのもあつ

た（伊豫太山寺庫裏）尚ほ廻廊や塀の窓にも、柱間一

ばいに上の部をひろげて用ひ（長野市大勸進塀）、

また單獨にもつけたりした（松本市郊外牛伏寺）。極く新し

くは佛像等をまつるために、單獨に高いところ

に、厨子様のものゝ正面につけたのなごもある

のである。つまり此の種の窓は鎌倉以降ではある

が、最も生命も永く應用の範圍も廣い様である、

といふのは、本式の花頭から、漸く變化して種々

の形ができ、佛寺のみならず、住宅茶室等にも應

用し得るやうになり、決して之れが他の細部との

調和を缺くといふ様な事はないからである。だか

ら此の形の窓はいつ迄つゞくか先きが知れない、

夫れ丈け注意せぬと、愈よ拙い形の變なものにな

らぬとも限らぬ。

* * * * *

花頭窓は遂に城堡建築に用ひらるゝやうになつ

た。多分桃山時代からであらう。實例は澤山ある

のかも知れぬが、今私の知つてゐるのは、近江の

彦根城の天主閣についてゐる例である。昨年一月

友人木下助三郎君が彦根に歸省してゐるとき、頼

んで撮影して貰つたものを第三二四圖に掲げてお

いたから、見れば大體見當がつくであらう。此圖は

他の圖版の組合の都合上一番先にだしておいた。

斯の如く禪宗建築の細部として、最初我國に入つ

てきたと思はれるものが、遂に城の窓に迄用ひら

れ、而もさう變でないばかりでなく、中々よく似

合つてゐるから、不調和どころの騒ぎではない。實にこの種の窓は、洵に應用の途が廣く、ごの様などころへ用ひても、よく調和のとれる點は、全く獨得といつてよろしい。

彦根城は慶長八年起工、二十年たつて落成したのでさうで、井伊直勝が築いたのであるが、其天主閣は京極高次が大津に築いたのを移したのでさうである。高次は近江の人で若狹守と稱し、四十七歳で慶長十四年五月死んだといふ。若しこの花頭窓が初めからついてゐたのならば、正に桃山時代に屬すべきものであるし、彦根に移したときつけたのなら——實はいつ移したのか私は知らぬが——江戸時代かも判らぬ。

併しながら桃山時代には、既に記したので判つてゐるやうが、花頭窓の應用も随分ひろくなつたのだから、城の天主閣にも用ひられたと考へ得るのである。さうすると、桃山からとして差支ないや

うであるから、こゝに追加として記しておく。
花頭窓終り。(昭和五年三月十二日稿了)